

つぶやき便

「パピロってなんですか？」

それが、筆者と三宅村との関係を深めることになったきっかけだった。

東京都三宅村。人口約二七〇〇人、超高齢化社会を迎えている小さな島だ。そこには、昭和四二年から続く「築穴製菓」というパン屋がある。筆者が島を初めて訪れたとき、「パピロ」という不思議な名前のパンを知り、それを製造している「築穴製菓」と出会った。そして二〇一一年八月、その出会いをきっかけに「築穴製菓」で住み込みアルバイトをすることにになった。

住み込み先は、二代目である築穴一也さん・美喜子さん夫婦の家だ。アルバイトでは、ほぼ毎日パンを製造し、そして島内の商店に配達する。三宅村には大型スーパーやコンビニがないため、個人経営の商店は村民の暮らしには欠かせない。それは、村でのコミュニケーションの場としても欠かせない存在である。ある日、配達に同行しているなかで一人の高齢者と出会った。彼女は買い物のためというよりは、むしろ店主と話をすることを楽しみに訪れてい

るようだった。しばらくすると、一人の女性が店にやってきて、「帰るよ」と彼女に声をかけた。家族の一員だと想像できるが、彼女は名残惜しそうに会計を済ませて車に乗り込んでいった。自ら車を運転できない高齢者は、家族や他者に頼りながら商店に通い、店主と話をして帰って行く。それを目の当たりにしたこと、村での移動手段が限られている環境では、それにともなって行動範囲が限られ、つながりにくい現象が起こっている。しかし、それでも彼女たちはそのなかで積極的に外出をし、コミュニケーションの機会を持っている。ここからは、強いコミュニケーション欲求を感じることができると筆者は、コミュニケーション・デザインの必要性を感じ、研究対象地としてさらなるフィールドワークをおこなうことにした。

筆者は、村民の誰もが利用する商店を起点としたコミュニケーションを考えることにした。三宅村は五つの集落に分かれており、各集落に商店が点在している。それらは、個人経営のため扱っている商品は異なっている。しかし、「築穴製菓」の商品は各集落の商店で販売されており、老若男女問わず気軽に手に取られていることに気付いた。そこで、商品のパッケージを新た

▼「つぶやき便」発行から
手に取られるまで

印刷・発行



夏パン屋のつぶやき便
これは、パン屋のレジスター裏に貼るための紙で、
そこから見えるものは、色の変更、物の入れ、自然の
写真、面白いな内容を「つぶやき便」の中、印刷の工
場に取も製してよ。

1995年、8月8日、富賀神社大祭、神着から坪田へ、
赤場跑にて戻れる。笑っていたら、はっぴの袖だけしか
なかった。傷つく、發行。



商品の製造



パッケージに貼る



配達



受け手へ



なメディアとしてとらえることで、村全域を対象とし
たコミュニケーションのきっかけを誘発することがで
きるのではないかと考えた。

二〇二二年八月、村全域に配達されていくこのメデイ
アを「つぶやき便」と名付け、一ヶ月間の実験をおこな
った。まず、築穴一也さんがカレンダーに書き込んできた
何十年もの記録から一日分の記録をラベルシールに印
刷する。それをパンのパッケージに貼ることで、メデイ
アとして村全域に配達され、人の手へとわたっていく。
三宅村は、新聞の朝刊さえもその日の夕方にしか手元
に届かない島である。その環境において「つぶやき便」
は、毎朝一時には村全域で手にすることができ、
新たなメディアのかたちなのだ。また、パンは毎日製造・

配達されるため、日々掲載内容を更新することができ
る。この仕組みを活かし、配達される日付と記録の日
付をリンクさせることで、何年前前のこの日に書かれ
た記録に触れることができる。これは、その当時への
回想や、思い出話のきっかけとなりうるだろう。

本研究は、メディアを介して誘発されたコミュニ
ケーションに着目する。「つぶやき便」を受け取った
人びとを観察し、メディアをきっかけとしたコミュニ
ケーションの存在や、芽生えた想いを記述することで、
村民にとって「つぶやき便」がどのようなメディアだっ
たのかを明らかにしていきたい。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程

加藤文俊研究室

上地里佳

@Riiiiiiiiica